

小説、未来の印刷屋

萩原 祥花

「お母さんはなんで印刷屋をしてるの？」
ある日、私は娘に聞かれた。水をきかけ
に昔私におきた不思議なできごとを娘に話す
事にした。「お母さんが小さい頃……」

「お父さんなんてさらい……」
幼い頃の私は、印刷会社を運営している仕事

人間のケチなお父さんがさらいだった。お父
さんは、未来の印刷は俺にかかっている。
「いつも言ってるよ、わかからない研究にお金を
かけ、周りの人から笑われてる存在だった。
たまの休みにつれて、てくれるのは、少し大
きいショーツ、ピングモールだけだ、どこへ行
っても買ってくれるのはエムドナルドバーが
一の安いシエイクだけだ。」

ある日、せいかくの春休みだから家族でバ
カ旅行へ行きたいという話になった。みんな

なで盛り上がっていた所に、お父さんが帰
てきた。さ、そくお父さんに旅行の話をする
と

「だめだ。春休みでも仕事だ、てあるんだ
それに旅行なんてお金がたくさんかかるんだ
ぞい。
そのわりにはほぶるつにお金をかけているくせ
にと心の中でつぶやいた。そう言われ、お父
さんに

「なんでいつも仕事ばかりで家族と旅行に

行こうとしなりの？お金がかかる、て今まで
一回も旅行に行、たことないじゃん、いつも
仕事ばかりで、お父さんなんて大さらいい

こんな風に幼い頃私は、家族より仕事が大
事な父と、その父が営む印刷というものが大
らいだった。

旅行を反対された。一人で泣いて、自分の部屋へ
閉いこもった。一人で泣いて、今まで
大事にしてきたクマのぬいぐるみ、テリ、がと
つぜんしゃべりだした。

「そんなにお父さんがさらいたの？でもお父さんが働いているからこそ君は幸せに生きていけるんだよ。僕がこれからの印刷がどうなっていくのが教えてあげよう。それを知ったらきっと君の考えも変わるはずだよ。」
そう言っでぬいぐるみのテリィは私の手を引いて未来へ連れ歩いてくれた。

時代は2050年。未来についたテリィは私にこう言った。

「もし君のお父さんが印刷屋をやっていたら、たさとする。そしてたら印刷という文化はみるみるおとろえていってしまおう。でも君のお父さんが印刷屋を続けて未来につなげてくれたからこそ2050年ではこんなに印刷が発展しているんだい。」
そこで私はおどろく光景をまのあたりにしたのだ。そこには頭になにか装置のような物を取りつけている人がたくさんいた。するとその人達の目の前にある紙に次々と文字

が浮びあがっていったのだ。

っとういうこと？

っ君がいる時代に君のお父さんが考えた未来の印刷の研究をこのことにこの2050年では頭で考えたものが印刷できるようになったというんだよ。今は君のお父さんは周りからみんな夢物語と笑われてるがもし出来れば人は努力すればどんなことだってできるんだ。夢は小さいより大きいほうがいい。君のお父さんみたいにい。

そう言っでからテリは動かなくた。

った、気付くと元の自分の部屋に戻った。

のだ。このことをかきに私は印刷がどい

ほどすばらしいものかを知った。今までさら

いだった印刷屋やお父さんを尊敬した。

っそして私は印刷屋には、ただよい

私の話を聞いて娘は、

っいやあ私も印刷屋になろうかな。

ほっソとつぶやきに、こりほえんだ。